

大阪フィルメンバーによる室内楽名曲コンサート

大阪フィルハーモニー交響楽団のトップ奏者が、モーツァルトとベートーヴェンの弦楽四重奏の名曲に挑む。特にベートーヴェンの第15番は難曲として知られ、弦楽四重奏を志す者にとっては、憧れの曲。このコンサートの聴きどころを、コンサートマスター須山暢大と2nd ヴァイオリンのトップ奏者 宮田英恵が語ってくれた。

(インタビュー取材・撮影:磯島浩彰)



——大阪フィルの弦楽器トップ奏者による弦楽四重奏のコンサートをされますが、聴きどころを教えてください。

須山暢大：大阪フィルは毎年9月に「大阪クラシック」があって、メンバー同士で室内楽を演奏する機会が多いオーケストラですが、今回のように準備に時間がかけられる機会は多くありません。貴重な機会ですので、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第15番に挑戦することにしました。これまでベートーヴェンの弦楽四重奏曲は一通り演奏しましたが、後期の作品は技術的な事だけでなく精神性も重要で、一生をかけて取り組むべき作品だと思います。

——ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第15番は晩年、作曲途中で病に倒れたベートーヴェンが回復した後、神に感謝して教会旋法で書き上げた、まるで自身の信仰告白のような第3楽章を中心とした5楽章の曲です。

須山：楽譜には「神に感謝する！」と書かれています。今回一緒に演奏させていただくチェロの花崎さんはオーケストラの傍ら、ご自分のエルデーディ弦楽四重奏団で30年以上に渡りカルテットの活動実績を持つ大ベテランです。ほかの3人は若い世代のメンバーで今回、花崎さんから多くの事を吸収しようと頑張っています。

——今回の演奏会に向けた宮田さんの抱負を聞かせてください。

宮田英恵：ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は、初期の作品18や、中期の作品を演奏して来ましたが、後期の作品に取り組むのは今回が初めてです。チェロの花崎さんは大学時代にカルテットなどを教わっていた先生でもあります。今回、素晴らしいメンバーとベートーヴェン後期の代表曲第15番を弾けるのは、私にとって千載一遇のチャンスです。

——第15番の魅力は何でしょう。

宮田：第3楽章は確かに特別ですが、第1楽章、第2楽章も魅力的です。楽譜に書かれている音符や休符、強弱記号まで、何一つとして無駄なモノはありません。凄い曲です。

——オープニングを飾るモーツァルトの弦楽四重奏曲第 17 番「狩」は人気の曲ですが、こちらは如何でしょうか。

須山：コンサートのオープニングに相応しい華やかな作品だと思います。この曲を通してベートーヴェンの後期の世界に入って頂ければと思います。

——最後にお客様へメッセージをお願いします。

宮田：呼吸するように自然体でチェロを弾かれる花崎さんから学ぶことは沢山あります。今回演奏する 15 番は取り上げる機会は少ないですが、素晴らしい作品ですので、ぜひお聴きください。

須山：大阪フィルの弦楽器トップ奏者のカルテットとして、相応しいパフォーマンスをしなければ、と思います。練習を積み重ね、いつも以上に強い思いで臨む我々 4 人の演奏をぜひ聴きに來てください。